

1936年のアレクサンダー・スラヴィクの論文をめぐる

林 敬 太

1920年代のウィーンに、街角で東洋人に声をかけてはカフェに連れ込む青年がいた。彼の名はアレクサンダー・スラヴィク（1900～1997）。会社員として働きながらウィーン大学に通う学生であり、幼少期から温めていた日本研究へ一歩を踏み出したところだった。彼の「収穫」の中には歌人の斎藤茂吉や民俗学者の岡正雄がいた。茂吉との出会いは彼にとって少なからず意味のあるものだったが、ウィーンの日本学および民俗学にとっては、茂吉との関係よりもむしろスラヴィクと岡の関係は非常に意義のあることだった。それは、ひとつは彼ら2人によって文献学が中心だったウィーンの日本学に、フィールドワークをはじめとした民俗学、文化人類学的手法が持ち込まれたことである。彼らの存在をきっかけとして、ウィーンの日本学は学際的な地域文化研究へ転換することになった。そしてもうひとつは、岡とスラヴィクによって折口信夫が提唱した「まれびと論」がウィーンの民俗学へ紹介された事である。スラヴィクは「まれびと」を「祭祀的来訪者複合」(Komplex kultischer Besucher)と訳し、今日でもヨーロッパ圏の民俗学では基本的な分析概念の一つとなっている¹⁾。しかしながら、日本の民俗学が今日、国内の調査研究に集中しているためか、スラヴィクの存在は日本では決して大きいとは言えない。

そこで本稿は、1936年に発表されたスラヴィクの論文 *Kultische Geheimbunde der Japaner und Germanen (Eine vergleichende Studie)* および、その日本語訳である「日本とゲルマンの祭祀秘密結社 ―一つの比較研究―」を取り上げ、内容を概観してその主張を読み解く²⁾。それによってドイツ語圏の民俗学に対する日本からの影響を把握すると同時に、1930年代のウィーンにおける思想的な潮流の一端を理解することを試みる。本稿の1章において、まずはスラヴィクの来歴を紹介し、次の2章で上記の論文について全体の要旨と特徴をまとめ、この論文がどのような内容かを述べる。続く3、4章では、論文の構造を明らかにしスラヴィクの分析手法についての考察を行う。スラヴィクの論文の中では最初期のものだが、彼の業績に通底する問題意識は既に備えている³⁾。そして5章では、論文の最後となる「結論」を読み解いてスラヴィクの主張を分析したい。

1) 「レコード芸術」(音楽之友社)、2016年8月号47頁では、伊東信宏がルーマニアのクリスマスを紹介する際に、スラヴィクの名前と共に「祭祀的来訪者複合」を挙げている。

2) *Wiener Beiträge zur Kulturgeschichte und Linguistik*, vol. 4, S.675-763, Wien.

日本語訳は住谷一彦、クライナー・ヨーゼフ訳『日本文化の古層』未来社1984、43 - 153頁。

3) 『日本文化の古層』159頁。住谷、クライナーによるあとがきにて言及されている。

1. アレクサンダー・スラヴィクの来歴

1900年に彼は現チェコのチェスケー・ブジェヨヴィツェ（ドイツ語名ペーミッシェ・ブトヴァイス）市で、帝国軍人の家庭に生まれた⁴⁾。日露戦争を研究していた父親の影響を受け、アレクサンダーは物心ついた頃にはもう日本に心を奪われていた。しかし当時は日本語の教材はおろか文献自体が入手困難であり、父親がアレクサンダーの為に入手してくれたのは中国語の文法書だったという。彼にとっては回り道だったのかもしれないが、日本の文化をアジア全域の中で包括的に捉える彼の視野は、この時から培われていたと言えるかもしれない。家計が苦しくなったため大学への進学は困難になり、職業専門学校を経てジューメンスの子会社に就職した。しかし、日本研究への情熱は収まらず、仕事を続けながらウィーン大学の学生としてアジア研究に従事していた。斎藤茂吉に和歌を習うなど、ウィーンに留学してくる日本人たちと交流を深めていくのもこの頃からである。冒頭に挙げた、東洋人にいきなり声をかける姿は青年スラヴィクを象徴する情景として、斎藤茂吉も鮮烈に覚えていたようだ⁵⁾。

主に事務的な事情により博士論文の提出に失敗し、一度は大学を去るが、1929年には留学してきた岡正雄と意気投合し、民俗学の分野で日本研究を再開する。岡が1933年に提出した博士論文のドイツ語訳を手伝い、自身も35年に、古代における朝鮮半島と日本列島の交流を主題にして再度博士論文を執筆し、今度は博士号を取得した。本稿で取り上げる論文はその翌年に発表されたものである。その後、38年にウィーン大学は岡正雄を招聘して日本研究所を設立し、スラヴィクは助手として参加することになった。ところが、第二次大戦の勃発に伴い岡は帰国、スラヴィクもドイツ陸軍に召集された。日本研究所で常勤職を得る為に教授資格論文を用意しており、従軍中も肌身離さず持っていたが、原稿はベルリンで焼失してしまった。さらに、45年末になって捕虜から解放されたものの、日本学研究所は閉鎖されスラヴィクも失職した。ウィーン大学で日本学研究が少しずつではあるが再開され、スラヴィクが再び大学に戻るのは戦後数年が経ってからであり、彼が教授資格論文を提出できたのは53年のことであった。スラヴィク自身の人生は既に半世紀を過ぎていたが、彼の活躍はここからが本番と言える。戦後のウィーン日本学はスラヴィクが中心となって興隆し、また日本との学術的交流の窓口として、民俗学に限らず多くの日本人学生を受け入れて影響を与えてきた。

4) スラヴィクの来歴については『日本文化の古層』7-18、21-42頁を参照している。

5) 松下紘一郎著『茂吉さんは私の友人でした：スラヴィク博士と茂吉山人』葦書房、2002、14頁。

2. 「日本とゲルマンの祭祀秘密結社 ―一つの比較研究―」について、内容の概略

スラヴィクの著作は1984年に、教え子である住谷一彦とヨーゼフ・クライナーによって日本語に翻訳されている。スラヴィクが研学生活50周年を迎えた記念であると同時に、日本に彼の研究成果を紹介する目的があった。1936年から発表されてきた6本の論文に加え、スラヴィク自身が日本語で新たに書き下ろした原稿を加え、全七章構成で1冊の本にまとめられた。それが『日本文化の古層』である⁶⁾。「私の研学生活50年」と題される第1章がその書き下ろしの部分で、これまでの研究の道筋が総括されている。この中で最後に彼は、研究テーマを6つ挙げている。それらは独立しつつも、それぞれが相互に他のテーマを補強している。続く第二章から第七章までは、それぞれの研究テーマに沿った論文が時系列に沿って並べられている。各章は元々独立した論文のため、通読しなくても支障はないが、前述のとおり、各論文で扱われているテーマは相互に関連している⁷⁾。また、各章には住谷とクライナーによる解説がついており、補足情報を得ることが出来る。

第二章である「日本とゲルマンの祭祀秘密結社 ―一つの比較研究―」は、1936年にウィーンで発行された *Wiener Beiträge zur Kulturgeschichte und Linguistik*, vol. 4誌に掲載された "Kultische Geheimbunde der Japaner und Germanen (Eine vergleichende Studie)" を翻訳したものである。日本とゲルマンの様々な祝祭を分析し、それらの共通点を挙げる構成になっている⁸⁾。この論文と同時期に岡正雄が博士論文「古日本の文化層」をウィーン

6) 『日本文化の古層』41-42頁によれば、住谷とクライナーがスラヴィクによるドイツ語の下書きを確認したところ、日本語原稿と下書きで内容にかなりの差異があった。そのため、住谷とクライナーは日本語にない部分を加筆して完成稿とした。

7) 本稿では趣旨から外れるために取り扱わないが、『日本文化の古層』第三章から第七章までの概略をここに付記しておく。

第三章は「車田考」という表題の論文で、日本の一部地域で行われている、稲が円の文様を描くように植えられた水田についての考察である。スラヴィクはこれを東南アジアにある類似した風習と比較し、東南アジアと日本の関係を明らかにした。

第四章は「まれびと考」と題して、アイヌの祝祭イヨマンテを対象としてその構造を分析することで、折口が提唱した「まれびと論」を補強し、一地方の特異な現象から普遍的な類型として拡張させている。

第五章から第七章までは日本語の起源を探求する内容になっている。第五章は「単人問題に関する若干の考察」と題され、九州各地にかつて居住した単人という集団が使用していた言葉と東南アジア諸語を比較した。第六章は「日本語の成立における蝦夷語の役割」という題で、古代日本語と蝦夷語の間に、さらに共通した祖語Xが存在するのではないか、と仮定した。第七章は「日本学における言語学的研究の意義」と題され、短いながらも古代日本語の起源と成立過程について総括している。

8) この論文において、ゲルマンが何を指すかは曖昧である。古代ローマ時代のゲルマニアに由来する地理的な呼称なのか、言語的にドイツ語圏のことを指すのか。いわゆる「ゲルマン民族」と呼ばれる血統を指すのか。このように、民俗学 (Volkskunde) の基本概念だった民族 (Volk) とは何のことを指すのか、結局は曖昧なまま議論が終わってしまったのが1930年代における民俗学の実情だった。本稿ではスラヴィクの紹介に話題を絞るため、彼が用いているゲルマンという呼称はそのまま残すことにする。民族 (Volk) 論争についての詳細は河野真『愛知大学国研叢書第3期第8冊 ドイツ民俗学とナチズム』(創土社2005)を参照されたい。

大学民族学研究所に提出しており、相互に影響を受けていたことが窺われる⁹⁾。

この論文において、スラヴィクが主張する内容そのものは至ってシンプルである。論文が執筆された当時、日本とゲルマンの祝祭には共通点があるという主張がウィーンの日本学や民俗学の研究者によって行われていた。スラヴィクはその指摘がどの程度まで妥当なのか、日本とゲルマンの祝祭における要素を抽出し、細分化してカテゴライズすることで両者を比較したのだ。そして論文中の各所で示した数々の共通点から、結論では日本とゲルマンの間に何らかの関係があるのではないかという事を示唆している。しかしながら、日本とゲルマンは地理的に遠く隔たっており、両者の関係を証明するためには、ユーラシア大陸のほぼ全域という広大な中間領域に対する調査研究が必要になってくる、さらにその際には各地の祝祭やその他の慣習に対して構造的な分析を行うべきである、として論文を結んでいる。

3. 論文全体を通しての特徴

全体を通してみると、この論文の研究手法には2つ大きな特徴がある。

1つは、ある特定の地域を対象にしたフィールドワークではなく、日本とゲルマンの祝祭を包括的に取り扱う手法が採られている点である。スラヴィク自身はまだ36年の時点で日本を訪れてはおらず、主に岡によってウィーンにもたらされた資料を用いて執筆している。その為、量的には限られた資料を読み込む作業に専念せざるを得なかったと考えられる。スラヴィクは個々の事例に対して、年代の違いをあまり考慮せず、神話から現代の祝祭までを等価値に扱っている。翻訳者の住谷とクライナーは、この手法は歴史的経緯を重視するそれまでのウィーン民俗学の潮流とは一線を画し、むしろ神話と民俗的な風習を比較しパラレルに論じる柳田國男に近いものになっていると評価している¹⁰⁾。

もう1つは、図式的に分類、整理する手法である。住谷とクライナーはこうした思考方法をカズイステーク（概念図式）と呼び、日本の民俗学には異質なものだとしている¹¹⁾。特に、ドイツ語の原文では冒頭にその特徴が顕著に現れている。日本語版では紙幅の都合上か省略されてしまっているが、原文では、論文の冒頭に内容構成が掲載されている¹²⁾。この目次によって、スラヴィクが日本とゲルマンの祝祭に見られる要素を抽出し、階層化して整理していることが見て取れる。本文中には目次よりもさらに細かく見出しが設けられており、この論文が構成している階層はさらに複雑なものとなっている。スラヴィクはそれぞれの要素に対して、ローマ数字、アラビア数字、アルファベット、括弧付きのロー

9) 『日本文化の古層』43頁。岡の博士論文は未だ出版も邦訳もされていない。岡は柳田國男、折口信夫に続く第3の「日本民俗学の父」と言われながら、大規模な著作がこれまで一般に公開されていない。

10) 同上251頁。

11) 同上195頁。この解説は第四章「まれびと」に付されたものだが、スラヴィクの研究手法に共通する特徴として説明されている。

12) 本稿末の図1に、目次の日本語訳を掲載した。

マ数字などを用いてカテゴリーを細分化している。本稿では目次に載っていない小見出しも加えて詳細な図式を作成し、稿末に付した¹³⁾。

また住谷とクライナーは、こうしたスラヴィクの研究手法は当時では斬新なものだった、としている。この当時、民俗学をはじめとした神話研究では系統論が主流だったが、スラヴィクはむしろ後年に普及する構造論に近い手法を取っているという¹⁴⁾。日本とゲルマンは地理的にも隔絶しているため、神話そのものの直接的な関係は指摘できないためであると思われる。直接つながりがある神話ではないからこそ、神話のテキストや祝祭と言った資料から要素を抽出して比較するという手法になり、それが構造論的になったのではないかと考えられる。

さて、この目次について注目すべき点がある。それは、この目次がある種のチェックリストとして活用できる可能性があることだ。もし、何らかの祝祭に赴いてそれを観察する機会を得たとき、手早く記録できるこの種のリストは大いに助けになるものと思われる。スラヴィク自身が日本訪れ、調査を実施する機会に恵まれたのは、この論文の発表から実に20年以上が経過した1957年のことであった。しかしながら、来歴を見ても、現地調査は彼の悲願であったはずで、いつか来るべきチャンスのために、準備を進めていたのではないだろうか。後述することになるが、論文の結論においてスラヴィクは、日本を含めたアジア圏に対する包括的な調査が必要だと提唱している。そして、住谷とクライナーは『日本文化の古層』にこの「日本とゲルマンの祭祀秘密結社 ―一つの比較研究―」を収録した理由として、第二次大戦後のスラヴィクが、この論文で取り上げた個々の事例をさらに発展させていった事実を挙げ、この論文こそが研究の出発点に近いものだとしている¹⁵⁾。

4. 論文の序および本論に含まれる各項目の概略

序 (Einleitung)

論文の序においてスラヴィクは執筆の動機、すなわち1930年代にウィーンで行われていた日本学の議論を紹介している。当時、岡をはじめとした日頃の複数の研究者が、日本とゲルマンの双方で類似する祝祭が挙行されている事を指摘していた。特に岡は、博士論文の中でその類似点に触れていた。スラヴィクはそれらの議論を踏まえ、日独の文化比較を試みたのがこの論文である。

この論文の中でスラヴィクは、祝祭を挙行する集団に注目してそれを主題に選んでいる。ゲルマン及び日本に存在するとされるこれらの集団をスラヴィクは秘密結社 (Geheimbund) と祭祀結社 (Kultbund) と呼んでいる。そして、両者をまとめて祭祀秘密結社と呼称している。一般的には反社会的、反倫理的なイメージが付きまとう名称だが、スラヴィクは次のように定義している。秘密結社とは、共同体の内部でその存在が秘

13) 本稿末の図2、3参照。

14) 『日本文化の古層』251頁。

15) 同上159頁。

密にされている集団である。祭祀結社とは、共同体の内部でその存在は知られているが、執り行われる儀礼は秘密にされている、いわゆる密儀 (Mysterien) を行う集団だとしている。

I. イデオロギー (Ideologisches)

論文の I においてスラヴィクは、祭祀秘密結社がどのような宗教的な特徴を持っているかを挙げている。そしてここで幾つかの下位区分を設けている。

この項目においてスラヴィクは、祭祀秘密結社の信仰する対象こそが「まれびと」、つまり「来訪者」であるとしている。「まれびと」は、どこか別の世界に住まう神々をはじめとした超越的存在のことである。それらは人間の住む世界に一時的に来訪し、やって来た彼らを歓待する行為こそが祝祭である、とされる。「まれびと」を初めて提唱した折口信夫は沖縄の神話、伝承に対する調査からその概念を導き出したが、スラヴィクはこれを日本の他の地域で挙行される祝祭にも応用し、さらに日本以外の地域、そしてゲルマンの神話、民話、祝祭に対象を広げていった。そして、この現象に「祭祀的来訪者複合 (コンプレックス) (Komplex kultischer Besucher)」という訳語を考案した。このようにスラヴィクは、折口の「まれびと論」を一般化させ、日本とゲルマンの共通点として論じている¹⁶⁾。

II. 儀礼 (Rituelles)

この項目では、祝祭についてのより詳細な慣習が分析対象になる。死者祭祀の担い手 (Träger des Kultes) という最初の項目では、祝祭に来訪する「来訪者」を演じる側とそれを受け入れる側について、社会組織の中でどのような位置づけにあるのかを問題にしている。その次の項目である祭祀を行う場所と祭祀を行う時期に関してはスラヴィクはごく手短かにまとめているが、それに続く祭祀用具 (Kultgeräte) と祭祀行事 (Kulthandlungen) という2項目は、これらがこの論文の中心と言えるほど、豊富な事例と詳細な下位区分によって構成されている。祭祀用具では、A~Fまでの6種類のアトリブートを列挙している。

このアトリブートのうち、E. 乗り物 (Fahrzeuge) という項目の中でスラヴィクは「来訪者」を祀る祝祭の発達段階を (1) ~ (4) の4段階に分けて説明している¹⁷⁾。この箇所に限らず、この論文では何度かスラヴィクは「来訪者」について補足説明を試みている。それらは断片的なもので、この論文にある記述だけではいささか物足りなさを感じさせ、

16) 同上194頁によれば、スラヴィクはこの論文の後も様々な事例を挙げて「まれびと論」を展開させ、「まれびと」が世界で普遍的な神話類型であることを立証していく。しかし、日本民俗学は「まれびと」を日本固有の現象だと捉えてしまっており、住谷とクライナーは日本民俗学が国外の他地域に対する視点を持たないことを問題視している。彼らがスラヴィクの業績を日本に伝えようと思立った動機の1つだと思われる。

17) 「来訪者」の説明も階層化されているが、本論の趣旨から外れるため図2, 3からは割愛した。また、ここに限らずこの論文では、共時的な要素を併記する際だけでなく、通時的な変化もアルファベットや数字で順番をつけて記述するため、整理されているはずのものがかえって読みにくくなってしまっている。

情報不足という印象を与える。そのためか、後年になって改めて「来訪者」を詳細に論じた「まれびと考」を独立した論文として完成させている¹⁸⁾。

祭祀用具と同程度の分量で記述されている祭祀行事では、共同体で挙行されている祝祭について、儀礼の内容が分類、整理されている。ここにはA~Kまで11種類の下位カテゴリーが設けられている。

Ⅲ. 派生形態 (Derivate)

「Ⅱ. 儀礼」に続く大きな分類項目である「Ⅲ. 派生形態」はこれまでと比較して非常に簡素な記述である。ここでは、村落共同体に発生した祭祀秘密結社が、時代が下るにつれて様々な社会階層における職能集団に受け継がれ、変容していった経緯に触れている。例えば、村の若者で作られていた結社が、職人や芸人によって組織されるようになった、と説明している。ゲルマンにおいては都市の職人や商人によって組織されたツンフトが農村の秘密結社の後継者にあたる、とされる。しかしながら、スラヴィクがこの章で提示している日本およびゲルマンにおける歴史的な変遷がどの程度まで事実として確認できるのか、どのような事例が実在しているのか、具体的な資料や調査報告の提示は行われていない。日本とゲルマンの共通点を示すための章立てだったと思われるが、結果として未消化のまま課題として残された形となった。

Ⅳ. 秘密結社員としてのスサノオ (Susanowo als Geheimbündler)

結論の前に置かれている「Ⅳ. 秘密結社員としてのスサノオ」は、それまでの章とはかなり性格が異なる内容である。ここまでは日本とゲルマンにおける様々な祝祭を分類してきたが、ここでは、記紀神話におけるスサノオの描写に対象を絞り、それを「1. スサノオの暴力」、 「2. スサノオの仮装」、 「3. スサノオの悪行」と、3つの側面から分析している。つまり、Ⅰ、Ⅱまでが祝祭の分類表で、Ⅳがそれを用いた具体的なケーススタディという構成になっていると考えられる。ここではスサノオ神話をそのまま物語として捉えるのではなく、神話を秘密結社が執り行う密儀のメタファーだと仮定し、神話の中にこれまで分類してきた要素がどの程度含まれているかを照合している。果たしてスラヴィクの仮定が妥当かどうか、スサノオ神話と祝祭の儀礼の間にどのような関係があるのかという問題は本稿では追究する余裕はなく、以下に彼の主張を概観するに留めたい。

まず、「1. スサノオの暴力」では、スサノオという神の名前の由来、そしてそれが持つ意味を語源から説明し、この神が古代日本語において荒々しさや蛮勇と結びついていることを明らかにしている。次に、「2. スサノオの仮装」では、彼についての逸話が分析対象となっている。ここでは、スサノオが蓑笠をまとって旅人に身をやつしている様子が「まれびと」のメタファーだとされている。また、スサノオが宿を借りようと家々を巡って訪ね歩く様子を、祝祭の際に家々を巡る行事の暗喩だとしている。さらに、「3. スサノオの

18) 「まれびと考」もこの論文と同じ『日本文化の古層』に、第四章として収録されている。

悪行」では、彼が天界を追われる原因となった所業、すなわち、アマテラスの支配する機織り場に侵入し馬の死骸を投げ込むなどといった狼藉を、儀礼のメタファーとしている。このように、スラヴィクはスサノオにまつわる神話をⅠ、Ⅱの概念図式によって説明し、神話が祭祀秘密結社の秘儀と共通点を持つことを明らかにした。このようにして、彼は祭祀秘密結社の存在が歴史的に古くまで遡れる可能性を示唆したのである。そして彼は、こうした結社の存在が時間的、空間的に広く分布している可能性を結論で述べることになる。

5. 結論 (Schlußwort) について

この論文において最も注目すべき箇所は「結論」(Schlußwort)である。原文で761-763頁の3頁、日本語訳でも133-136頁の4頁と、この論文の中では小規模な章だが、問題は規模ではなくその内容である。全体を通じて日本とゲルマンの祝祭に関する資料の整理、分類が中心となるこの論文の中で、「結論」ではスラヴィクの見解に直接触れることができる。彼の主張には時代の限界を感じる点と、なおそれを越えて先進性が見られる点の両方が併存している。

「結論」においても度々日本およびゲルマンでの実例を交えつつ、スラヴィクは自説を展開していくが、ここで注目すべきは、日本とゲルマンの祝祭について、それらが同じ起源を持つという仮説が妥当であると述べる一方で、いくつか問題点を挙げて明確に肯定せず慎重な姿勢を取っていることである。

まず第1に、スラヴィクは日本とゲルマンの共通点を指摘する行為自体が恣意的なものであり、相違点も挙げようと思えば挙げられることを自覚している。「結論」の冒頭から論文にはまだ多くの不備があることを認め、日本とゲルマンの「まれびと」＝「祭祀的来訪者」の祝祭を構成する要素を解釈してきた、と記している。ここでスラヴィクは両者の構造が類似していることから、当時のウィーンで主流だった文化圏説に則り、共通する点があるならば起源を同じくするものだ、と述べている。しかしすぐさま、この推測に対していくつかの理由を挙げて拙速に結論づけることを避けている。

ここで彼は量的、質的な2つの面で仮説に反駁している。量の面で問題になるのは、地理的な条件である。すなわち、日本とゲルマンの間は、直接「来訪者」の習俗が流入したとは考えられないほど距離が隔たっている。もし両者が同じ起源を持つならば、朝鮮半島や東南アジア、中国やインド、中東といった他の地域にも痕跡なり祝祭なりが残されている可能性がある。スラヴィクは出来ることなら世界中を、少なくとも日本とゲルマンの間に広がるユーラシア大陸の諸地域を包括的に調査する必要がある、と提唱している。

さらに、こうした広範囲の調査に対して質の面でも問題点を挙げている。これまで、歴史的経過を考慮せずに比較する手法を採ってきたスラヴィクは、ここで通時的な議論に踏み込むことになる。彼はこれまでの分析対象であったイデオロギー、儀礼、社会構造といった要素に加え、「展開」という要素を付け加えている。「来訪者」の結社が社会とともに

変化し、或いは新しい形に派生していく実例を挙げ、「展開」という要素の重要性を指摘している。そして、通時的な研究を、広い地域を対象にした共時的な調査と組み合わせる必要も示唆し、こうした段階を経た上でなければ「来訪者」について地理的にも歴史的にも、起源についても何も主張することはできない、とさらに慎重な姿勢を示している。

さらにもう一つ、「結論」の半分近くを割いてゲルマン民族に関する議論を展開している。スラヴィクは日本列島に祭祀秘密結社というシステムが導入された経緯について推測を交えて述べ、これをヨーロッパの祭祀秘密結社について論じた先行研究と比較している。そして最後に、以下のような言葉で「結論」を締めくくっている。

ヘフラーがある観点において画期的な著作の中で、1つのゲルマン的な問題と見做していたものは、今や、ある1つの問題という正体を現した。それは狭い枠組みをはるかに超え、世界史的で民族学的な枠組みの中においてのみ、真の解明がなされなければならないのだ。

このように、スラヴィクはこれまでゲルマン民族の起源を措定する為に行われてきた先行研究に対して、日本における事例を比較することで相対化を図り、さらに世界に普遍的に存在する問題であり、より広い視点を持つべきだとしている。この文言によって彼は「ゲルマン民族起源論」と距離を置いたと言えるだろう。

こうした結論のあり方は、翻訳者の住谷とクライナーによれば、ウィーンで当時の主流であった文化圏説の影響を受けて書かれたものだという。1930年代当時にウィーンの民俗学で主流だった文化圏説では、共通点を持つ文化は歴史的に遡ると共通の起源があったとされ、日本とゲルマンの習俗に共通点があるならば、それは両者が共通の起源を持っている証拠である、と解釈すべきだという¹⁹⁾。この論文でも日本とゲルマンの間にそれがあつたのではないかと推測されている。しかし、スラヴィクはここで日本とゲルマン両者の直接的な関係を示す資料がないまま断言することを避け、むしろユーラシア大陸全域に対する地理的、歴史的研究という空白を提示することで、安易な主張に陥ることを避けている。

また、そうした慎重さによってゲルマンという言葉を用いながらも、ゲルマン民族起源説とも距離を置いた立場を取っていることが見てとれる。第二次大戦前までの民俗学においては、ゲルマン民族の残滓がどれだけ民間習俗に保存されているかという証拠を探し出すことが主流だった。この民族(Volk)の起源を求める傾向はナチス党の方針と合致し、第二次大戦前は民俗学研究において特にその傾向が見られた。逆に大戦後は、いかにしてその問題を克服するかが民俗学にとって分野全体の課題となった²⁰⁾。その際に中心となったのは、収集した資料を客観的に分析する手法を採り、戦前の時点で起源説と距離を置い

19) 『日本文化の古層』193頁。訳者の住谷、クライナーも「やや無理がある」と評している。

20) ゲルマン民族起源説については、拙稿「謝肉祭の研究史」Angelus Novus第43号2016を参照されたい。

ていた研究者たちだった。スラヴィクもそのような研究者の一人だったことをこの結論部は示している。

そして、結論でアジア全域に渡るさらなる研究の必要性を指摘したスラヴィクは、今後のキャリアで実際にそれらに取り組むことになる。既に経歴で述べた通り、彼は不本意とは言え日本研究に取り掛かる前にアジア全域の文化に触れていた。ゆえに、スラヴィクの視点には、前提としてアジア諸地域との比較があり、日本への文化伝播ルートが複数あったことも承知していたと思われる。それらは後年、アイス、隼人、大陸系渡来人など個別の研究対象になり、スラヴィクの様々な業績として展開してゆくことになる。

6. おわりに

スラヴィクの「結論」を通して、我々が考察出来ることは、彼がナチス時代をやり過ぎて戦後、民俗学者として生き延びる事が出来た理由である。それは、時流に従いつつも学問としての完成度を高めていくというバランス感覚の絶妙さであった。では、このバランスはどのようにしてもたらされたのか。それは、スラヴィクの研究姿勢に拠るところが大きいだろう。

第二次大戦後、民俗学者たちがこの学問分野を立て直していった経緯は様々であり、一概には言えない²¹⁾。スラヴィクの場合、来歴を振り返るとナチスとあまり接点がないどころか、社会的に成功しているとは言い難い、正に不遇と言うべき前半生だった。この一定の社会的地位を得ることが出来なかった事が、却って戦後に活躍出来た理由であることは否定できないだろう。

しかし、戦中から戦後に活動した民俗学者達は、ただ自分たちの置かれた境遇が幸いして生き延びることができただけではない。彼らには彼ら自身が行った研究の面で、ある程度の共通点がある。それは、地道に資料と向き合うというごく基本的な事である²²⁾。第二次大戦前までに活動していた研究者の中には、想像力を駆使して事実が確認できない古代の祝祭に対するイメージをふくらませ、「ゲルマン民族」という虚像を作り上げた者たちがいた。彼らの言説はナチスによる国家アイデンティティ形成に大きな役割を果たしたのである²³⁾。

本稿で扱った論文では、スラヴィクが第二次世界大戦以前から慎重に資料を分析する研究者だったことが理解できる。そして、そうした研究者が戦後になって研究に復帰できた好例だと言えるだろう。センセーショナルな主張を叫ばず、地道に研究することで自ずからナチスの「ゲルマン民族」と距離をおくことになったのである。地道な研究活動によって、時代を生き抜く普遍性が獲得出来ることを、スラヴィクの論文は改めて気づかせてく

21) 河野 真『愛知大学国研業書第3期第8冊 ドイツ民俗学とナチズム』創土社2005、463 - 505頁。

22) 同上、513 - 571頁。

23) 拙稿「謝肉祭の研究史」Angelus Novus 第43号2016、5頁。

れる。なお、『日本文化の古層』巻末に付けられた1982年までの著作一覧を参照すると、題名に「ゲルマン」の語が冠してあるのはこの「日本とゲルマンの祭祀秘密結社 ―一つの比較研究―」ただ一つである²⁴⁾。一覧のほとんどが日本を中心とした東アジアの研究で占められている中で、1936年に発表されたこの論文はまさしく時代に翻弄された証拠だと言えるだろう。

しかしながら、スラヴィクの薫陶を受けた住谷とクライナーによれば、スラヴィクは以下のような発言を残している：

「外国の立場から日本研究を行う場合には、それはいかなる場合にも比較研究であり、研究者が生まれ育った文化がその出発点になっているということを、常に意識する必要がある。」²⁵⁾

日本とゲルマンの比較という時代の徒花はそれで終わってしまったのではなく、より昇華された形でその後の研究に継承されたのである。

24) 『日本文化の古層』238-245頁。

25) 同上14頁。

日本とゲルマンの祭祀秘密結社——一つの比較研究——
序

I. イデオロギー

1. 宗教観念
2. 祭祀対象
 - A. 死者と死霊
 - B. 神々
 - C. デーモン
 - D. 動物
3. 祭祀対象の出自

II. 儀礼

1. 死者祭祀の担い手
2. 祭祀の時期
3. 祭祀の場所
4. 祭祀用具
 - A. 仮面衣装
 - B. こん棒, 杖
 - C. 武器
 - D. 音を出す道具
 - E. 乗り物
 - F. 太陽のシンボル
5. 祭祀行事
 - A. 籠りと忌み
 - B. 騒音と暴行
 - C. 家への侵入
 - D. 接吻と物乞い
 - E. 褒める, とがめる, からかう
 - F. 祝福
 - G. 機織と来訪
 - H. イニシエーション
 - I. デーモンの追放
 - J. 祭祀結社の供犠
 - K. 放火権

III. 派生形態

IV. 秘密結社員としてのスサノオ

結論

第1層	第2層	第3層	第4層	第5層		
序	秘密結社					
	祭祀結社					
一. イデオロギー	1. 宗教観念	来訪者複合				
		まれびと信仰				
	2. 祭祀対象	A. 死者と死霊				
						B. 神々
		母祖				
		山の神				
		英雄神				
		C. デーモン	馬			
		D. 動物				(1) 神的な騎手と共に
						(2) 死者を運ぶ
						(3) 騎手なし
						(4) 黒、白、斑
	(5) 脚が4本でない					
	(6) 首なし					
	(7) 群れ					
(8) 馬車の牽引馬						
3. 祭祀対象の出自		角のある動物				
		犬と狼				
		猫				
		(A) 海のかなた、海中				
		(B) 山間				
		(C) 地底				
(D) 海底						
(E) 山の内部						

図2. 論文の階層構造1枚目。

第1層	第2層	第3層	第4層	第5層		
二. 儀礼	1. 死者祭祀の担い手	(1) 若者組と子供組				
		(2) 祭祀結社				
		(3) 女性シャーマン				
		(4) 山人				
	2. 祭祀の時期	季節の変わり目			(1) 十二夜	
					(2) 謝肉祭	
	3. 祭祀の場所	墓地			(1) 海の彼方	
		不気味な場所				(2) 山間部
		黄泉の国				
	4. 祭祀用具	A. 仮面衣装				
		B. こん棒、杖				
		C. 武器				
		D. 音を出す道具				
		E. 乗り物				(1) 遺体を舟で流す
						(2) 舟に乗せ陸上で火葬
						(3) 舟に乗せ水上で火葬
						(4) 舟に乗せ墳墓に
						(5) 舟に乗せ火葬後に墳墓
						(6) 柩を川、沼に沈める
	(7) 舟、ソリ形の柩					
	(8) 火葬にし灰を散布					
F. 太陽のシンボル						
5. 祭祀行事	A. 籠りと忌み					
	B. 騒音と暴行					
	C. 家への侵入					
	D. 接吻と物乞い					
	E. 褒める、とがめる、からかう					
	F. 祝福					
	G. 機織と来訪					
	H. イニシエーション		(1) 秘儀			
			(2) 秘密結社による成人式			
	I. デーモンの追放					
	J. 祭祀結社の供犠		1. 動物			
2. 人間						
K. 放火権						
三. 派生形態						
四. 秘密結社員としてのスサノオ	1. スサノオの暴力					
	2. スサノオの仮装					
	3. スサノオの悪行					
結論						

図3. 論文の階層構造2枚目。